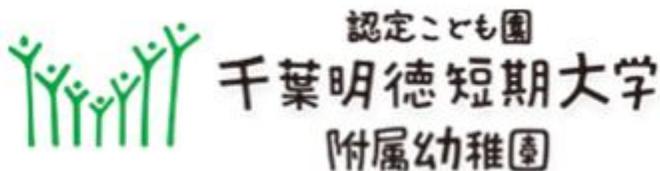


「時代が、めいとく幼稚園についてきた？」

めいとく幼稚園が長年行ってきた保育が、昨今、様々な調査研究で、その正当性が示されてきています。この冊子では、めいとくの保育と将来の子どもを取り巻く変化をご紹介します。



2020年6月発行

時代が、めいとく幼稚園についてきた？

理由その1

いま、何で「非認知的能力」や「社会情動的スキル」と言ったものが取り上げられているのでしょうか？



「エデュカール 84号 (2018年3月号)」より

いま、「非認知的能力」や「社会情動的スキル」といった言葉が取り上げられていることをご存じですか？

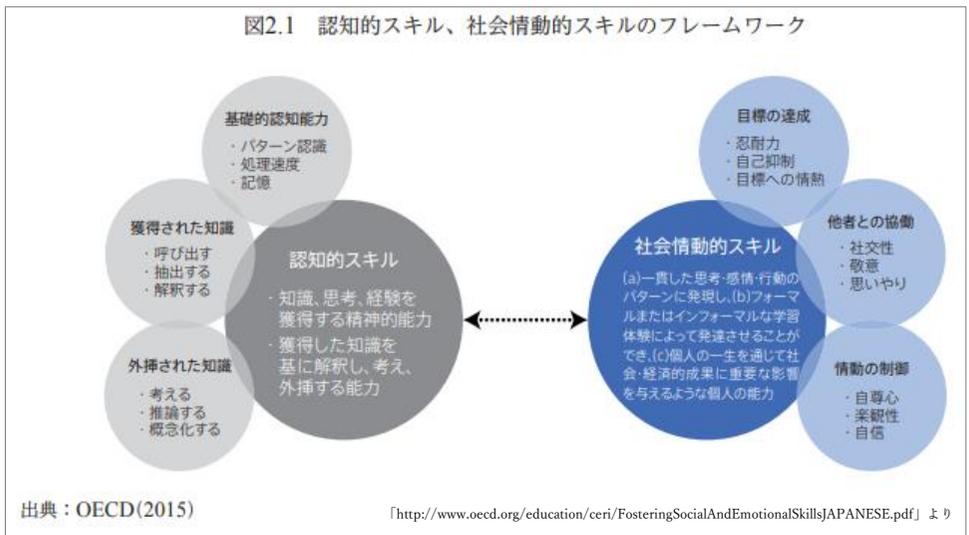
子どもたちが成長し社会の中心にでていくのは、20～30年後。急速に発達していくコンピューター・ネットワーク技術革新に、“いま”の当たり前が通用しないかもしれない未来。また、AI（人工知能）が発達して社会のニーズが変化しているかもしれない時代に、これから先、何を身に付けていけば良いのでしょうか？

ただ単に覚えるだけなら、AI（人工知能）にとって代わられてしまう未来が来てしまうかもしれません。

スマホが登場したり、急速なネット環境の整備に驚かされたりしていると、「ノーベル経済学賞を受賞したヘックマン氏が40年以上にわたって追跡調査した研究」が発表され注目されました。

この研究結果では、“幼少期の環境を豊かにすることが認知的スキル（IQ テストや学力検査などによって測定される能力）と非認知的スキルの両方に影響を与え、学業や働きぶりや社会的行動に肯定的な結果をもたらす”ということが示されました。

「幼児教育」が人生を変える、これだけの証拠」<https://toyokeizai.net/articles/-/73546> より



さらに、図の右側「社会情動的スキル」（忍耐力や自己制御、自尊心）といった特性を、幼児期にこそ身に付けることが期待され、そこでの違いが、大人になってからの生活にも大きな効果を継続させるということが示された研究でした。

時代が、めいとく幼稚園についてきた？

理由その2

では、どうやったら「非認知的能力」は育つのでしょうか？

2017年、幼稚園・子ども園・保育園の保育指針が改訂され、ほぼ統一されました。ここで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、10の姿が示され、幼児期の教育は、小学校教育の前倒しではなく、幼児期にこそ育む「小学校・中学校・高校へとつながる基礎」であると示されました。

その内容こそが、めいとく幼稚園が長年大切にしてきた保育そのものでした。



このような経緯で2017年度、保育・教育の政府のガイドラインを改定しました。

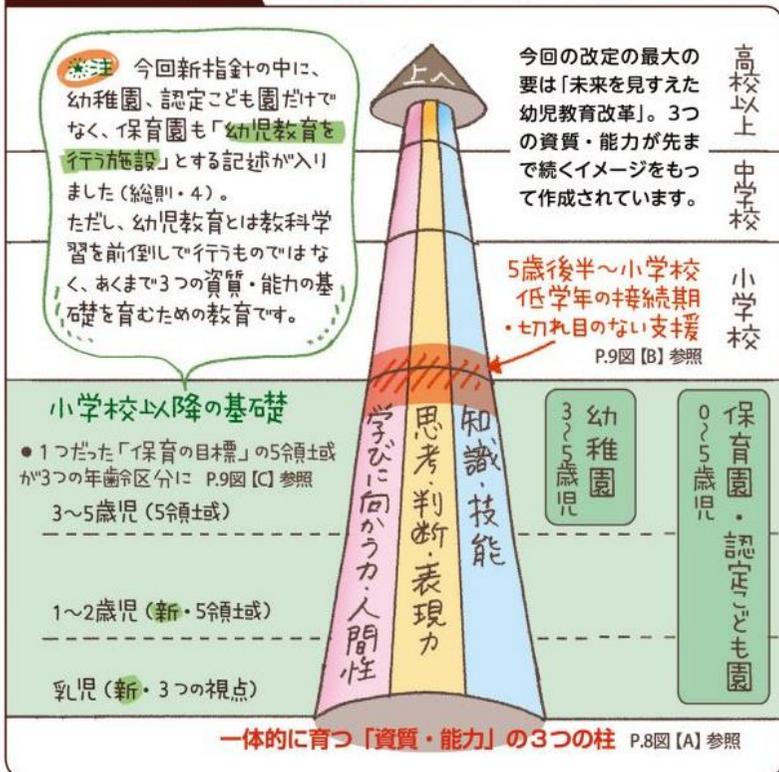
「エデュケーター 84号 (2018年3月号)」より



「エデュケーター 84号 (2018年3月号)」より

3つの資質・能力とは？

幼児教育に関する指針・要領改定ポイント



時代が、めいとか幼稚園についてきた？

理由その3

「ワークはやらないんですか？」「自由に遊んでいるだけですか？」という質問をいただくことがあります。

こういった質問をいただくことがあります。ここでも、その答えとなる調査結果が、2012年に示されました。

東京学芸大学名誉教授・杉原隆氏の調査によると、「積極的に体育指導を取り入れている幼稚園・保育園よりも、自由に遊ばせている園の子どもの方が、運動能力が高い」と言うのです。

論文「幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係」<https://ci.nii.ac.jp/naid/40017089078>より

この調査結果では、

運動指導や習い事として、定められた運動を繰り返すよりも、**好き勝手に**鬼ごっこ・木登り・鉄棒・砂場遊び・秘密基地作り等で**遊んでいる方**が、多くの種類の動きを経験でき、その結果、**運動能力が高まる**と示されました。

待ち時間が少なく、好きなことに没頭した方が、より動いている時間を多く取れるので、運動能力も向上するとのこと。

「NHK生活情報ブログ」<https://www.nhk.or.jp/seikatsu-blog/200/120093.html>より

「自由に遊んでいるだけ」に、一番意味があるんですね。

でも、だからといって、めいとか幼稚園が、全てを子ども任せにし、子どもを放任している訳ではありません。

ここがめいとか幼稚園の強みでもあるのですが、「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」へ子どもたちが向かうように、適切に保育者が配置され、適切にかかわり、創意工夫挑戦が行えるような物的環境を整えています。

文部科学省も、2012年に幼児期運動指針を通知しました。

ここでは、「幼児は、様々な遊びを中心に、毎日、合計60分以上、楽しく体を動かすことが大切」と示し、「幼児期において動きを身に付けていくにあたっては、トレーニングのように特定の動きばかりを経験したり、運動の頻度や強度が高過ぎ、特定の部位にストレスが加わるケガにつながったりしないよう注意が必要です。」と通知しています。

また、『時代が、めいとく幼稚園についてきた？理由その2』でご紹介した、文部科学省が示す幼稚園教育要領「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「8 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」では、「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり～」と示しており、一方的な、いわゆるワークでの学習を求めてはいません。

そういった中で、めいとく幼稚園では、遊び込める時間と空間と仲間を大切にしています。

子どもの成長に必要な「時間・空間・仲間」を“サンマ”と呼んでいます。具体的には、「遊び込める時間を十分に確保すること」「主体的に遊べる空間を作ること」「1学年3クラス編成での仲間がいること」で、子どもは仲間と互いに成長しあうと考えています。

時代が、めいとく幼稚園についてきた？

理由その4

知っている人は、知っていた。めいとく幼稚園の魅力。

この冊子は「時代が、めいとく幼稚園についてきた？」と、結構大それた題になっておりますが、最近になって、様々な調査・研究や文部科学省からの通知に加え、幼稚園教育要領の改訂などで、**子どもが主体的に行う活動**に着目され始めるようになりました。

しかし、めいとく幼稚園では、それらが発表されるずっと以前から、**遊びを中心にした保育**を展開してきました。

めいとく幼稚園では、創立から53年という長い歴史の中で、園児だった子親世代になり、そのお子様を通わせていただいている方が多くいらっしゃいます。

それはなぜか？

めいとく幼稚園で育った子どもが、どんな大人になるのかを知っているからこそ、卒園した子が親（親が祖父母）となり、自分の子どもも、「めいとく幼稚園に入園させたい」と選んでいただけているのではないのでしょうか。

時代が、めいとく幼稚園についてきた？

理由その5

子どもが遊ぶ環境がいま、また、見直されています。

2009年に「幼稚園施設整備指針」が見直され、園舎・園庭の計画が示されました。

また、幼稚園指導要領では、今回の改訂で新たに加わった前文にて「幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すために必要な環境を整え、一人一人の資質・能力を育てていくことは、(中略)大人に期待される役割である。」と示しました。

*さらに大事なことなので、「前文」という形で追加されたんですね。

「子どもは、どこで育つのか」が、いま、改めて大事にされてきている証といえます。

めいとく幼稚園の**恵まれた環境**の中で、子どもが子どもらしく、**主体的に遊び込む**からこそ、子ども自身の遊びの中に学びが生まれてくるのです。

実は、この「遊び込む経験」をする子が「学びに向かう力」が**高い**という調査結果も明らかになっています。

「学びに向かう力」を見取り、育み、つなぐために(前編) https://berd.benesse.jp/special/manabi/manabi_23.php より

③園での経験と子どもの「学びに向かう力」

園で「遊び込む経験」を多くするほうが、子どもの「学びに向かう力」は高い

「遊び込む経験」(P9、図2-1-1)の頻度に応じて2群に分けて、子どもの「学びに向かう力」との関連を調べた。その結果、年長児1年間に、園で「遊び込む経験」を多くしているほうが、「協調性」「がんばる力」「好奇心」「自己主張」「自己統制」などの「学びに向かう力」が高い傾向がみられた(図2-3-1)。また、自由に遊べる環境が十分にあるほど(図2-3-2)、先生の受容的な関わりがあるほど(図2-3-3)、遊び込む経験が多かった。遊び込む経験は、自由度の高い遊びの環境や先生の温かい関わりにより支えられていることがうかがえる。

「園での経験と幼児の成長に関する調査」https://berd.benesse.jp/up_images/research/Encyosa_web_all.pdf より

あらためて、めいとく幼稚園はどうでしょうか。

豊かな自然環境を有する恵まれた**空間**に、子どもが遊び込む経験ができる**時間**を確保しています。さらに、幼稚園で出会う多くの**仲間**が、めいとく幼稚園の子どもたちを育ててくれます。

園で、友だちとの「協同的な活動」を多く経験するほうが、子どもの「学びに向かう力」は高い

「協同的な活動」(P9、図2-1-1)の頻度に応じて2群に分けて、子どもの「学びに向かう力」との関連を調べたところ、「協同的な活動」を多く経験しているほうが、「学びに向かう力」が高い傾向がみられた(図2-3-4)。また「遊び込む経験」が多いほうが、「協同的な活動」も多く、2つの経験には関連がみられた(図2-3-5)。さらに、「協同的な活動」が多いほうが、「文字・数・思考」(認知的スキル)に関わるスコアも高かった(図2-3-6)。子どもは遊び込む中で、友だちとの関わりを通して、協調性や自己主張・自己統制などの「学びに向かう力」、友だちとのやりとりを支える「言葉」、また遊びを面白くする道具としての「文字や数」を身につけている可能性が示唆される。

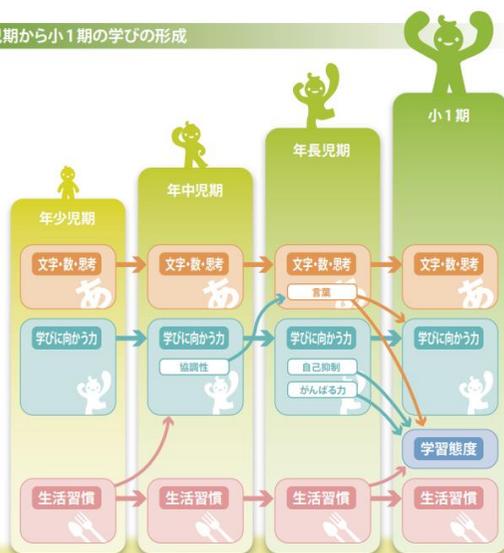
[https://berd.benesse.jp/up_images/research/Encyosa_web_all.pdf]より

また、小学校での「学習態度」は、小学生になれば勝手に表れるものではなく、これらの遊び込む経験で育つ「学びに向かう力」等が、「学習態度」へとつながっていているということが、最近の調査研究で明らかになってきたのです。

ここでも、また、「時代が、めいとく幼稚園についてきた」と言えると思います。

幼児期から小1期の学びの形成

図2-1



未来を見通しにくいほど、技術刷新が進むこの時代。
大切なお子様を、その激動の世に送り出さなければならない。

そんな現代だからこそ、幼児期の教育が、見直されてきています。

「知識及び技術の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」
「学びに向かう力・人間性等」を、恵まれた自然環境の中、
遊び込む時間と空間と仲間がいる「めいとく幼稚園」で育て
ていきませんか？

ぜひ、
お子様が「めいとく幼稚園」で遊ぶ姿を想像してみてください。



めいとく幼稚園で、お待ちしております